

主のみ心が成りますように

「その声は全地に響き渡り、その言葉は世界の果てにまで及ぶ」(ローマ10:18)

木村 幸夫

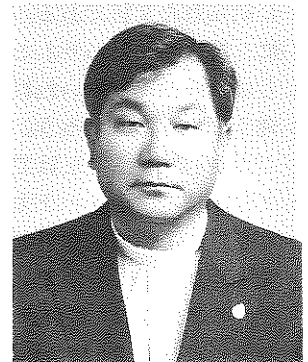
最近、以前から存じ上げているS姉をある講演会でお見かけした。大変、自信に満ち、美しくなられたと感じました。年に数回は拝眉する機会がある方ですが、年を追うごとに若く美しくなられるような気がしました。かつてわたしたちはその人の名をいわゆる通名で呼んでいましたが、今は本名の発音で呼んでいます。いつ頃からであろうかと振り返ってみますと自分の中では、つい10数年ほど前からのことではないかと思えます。聖公会という教会の中ですら、長い間ご苦労を忍ばれたこと、やっとわたしたちがその痛みに気づき始めたのが、10数年前であったのかということに、愕然とした次第です。

このような者がこの度、聖公会生野センターの運営委員会の長に互選されて、大変恐縮し、またその任に耐え得るであろうかといささかの不安も覚えているところです。委員諸氏のお支えをいただいておりますので、皆様のお助けとご支援をいただきますように、誌上を借りてお願い申し上げます。聖公会生野センターでは主事の呉光現氏を中心に聖ガブリエル教会の熱心なご理解ご協力の下、様々な具体的な働きが繰り広げられておりますが、それは単に社会福祉活動というのではなく、「神様のみ心が行われるように」という願いと祈りがその根本にあることは言うまでもありません。「…どうか主に従うわたしたちも、主の恵みによって人びとに仕え、弱い人を助け、倒れた人を起こし、苦しんでいる人を慰め、友のない人の友となり、人びとのまことの必要を満たして、ともに主の贖いのみ業にあずかるものとならせてください。わたしたちの病を負い、わたしたちの悲しみを担われた救い主イエス・キリストによってお願いいたします。アーメン」(日本聖公会祈禱書113頁)、

この祈りをもって全てがなされて行くのがセンターの働きです。センターが活動するところ、参与していく働き、直接的間接的に関わらず、「み国」のなることを願い、み心を携えて行き、実現していく働きであります。

わたしたち新約の民、新しいイスラエルとしての教会は、全地に響きわたる神様のみ声を聞き逃してはなりません。イエス様が命をかけて語られた神様のみ言葉に聴き従うときに、何が神様のみ心であり、何をなすべきかが明らかになって来るでしょう。数年前のことですが、東京近郊にある、心に傷を受けた人々が寄り添って生きる共同体を訪ね、祈りのひとときをもった時のことを思い出します。一人ひとりが自分の負っている重荷を言い表し、みんなが「○○さんの問題の上に神様のみ心になりまうように」と唱和しました。そのとき、祈りを求めた人の顔に、確信と希望の輝きを見ました。最初に記したS姉の顔の輝きも、微速ではありますが、確実に「神様のみ心がなされている」ことを現しているように感じました。さらにセンターの働きが、祝されて全ての生きとし生ける者が大切にされ、人々の魂、その心、その生活の全ての領域に神様の愛がしみわたるような共同体、人間関係が実現していくように願って止みません。

(きむら・ゆきお 司祭 大阪教区石橋聖トマス教会
牧師 聖公会生野センター運営委員長)



時のしるし

今年の夏は、O-157に翻弄された。

関西各地のプールは閉鎖され、予定されていたキャンプや夏祭りは中止になった。六千人の感染者を出した堺市にはなるべく近づかないという現象が起きたかと思うと、そうこうするうちに、観光地の旅館では堺市在住というだけで、宿泊を断るところがでてきた。旅館経営者にとって、食中毒は死活問題だ。まして、宿泊客がO-157に感染すれば、たいへんなことになる。そこで、堺市からの客という理由で断る。このニュースを聞いて、私は「朝鮮人・琉球人おことわり」という言葉を思い出してしまった。かつて、大阪の貸家の玄関に貼られた文言である。今回起きたことは要するに「堺人おことわり」ということだ。それとこれとは意味が違うといわれるかもしれない。確かに違う部分もあるだろう。しかし、個別に感染者かどうか判断することはできないゆえに、何の根拠もない堺在住者という大きなカテゴリーでひとくくりにして、それを全部排除してしまおうという考え方は、同じ発想ではないかと思う。

今やさすがに「朝鮮人・琉球人おことわり」の貼り紙はなくなったが、何かが起こると「堺人おことわり」が登場する。人々の心の中には、この感覚がいまだに生き続けていたといえるのではない。人間をあるカテゴリーでくくって、それ全部を排除しようとする発想が。本質的には同じことが、表面的には形を変えて継続しているのである。考えてみれば、そんな例はそこらじゅうにごろごろしている。そのひとつが、「国籍条項」というものだ。この数カ月では、「国籍条項」に関して三つの大きなニュースがあった。ひとつは、職員採用における国籍条項をもつ大阪市がその撤廃を見送ったというニュース、いまひとつは、これとは対照的に、川崎市が政令指定都市としては初めてその撤廃を決定したというニュース、そしてもうひとつは、東京都の管理職試験に日本国籍でないために受験を拒否された在日韓国人の保健婦の方が起こした訴訟について東京地裁の判決が出て、「国籍条項」が正当化されたニュースである。

国（自治省）としては、「当然の法理として、公権力の行使または国家意思形成への参画に携わる公務員には、日本国籍が必要」とする1953年の内

閣法制局の見解があるという。そして、これは国家公務員のみならず地方公務員にも適用するものとされてきた。川崎市は、これに対して「地方公務員は、地域に密着した職務が主であり、国籍にとらわれる必要はない」という見解を出した。ゆえに条件付きではあるが、その撤廃を決定したのである。

私たちの地域で、私たちと一緒に暮らし、私たちと一緒に社会を作っている人たちが、その地域の行政の職務につけないばかりか、地域の参政権もないという事態は、明らかに人権侵害の事態である。そして、このような事態を私たちが看過し続けるとすれば、それは犯罪的ですらある。敗訴した在日韓国人の鄭香均さんは、「本名のまま地域の保健活動を続け、職場で差別を感じることはなかったのに、管理職試験で『ああ、やっぱり差別はあったんだ』と思い知らされたという」（5月17日付朝日新聞朝刊）

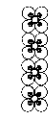
こうした「国籍条項」の存在は、あくまで行政の問題である。しかし、行政の問題としてかたづけしてしまうわけにはいかない。なぜなら、その存在を長年にわたって許してきたのは、他ならぬ住民である私たち自身でもあるからだ。つまり、私たち自身の心の中にも「国籍条項」が存在しているのだといえないだろうか。

私たちは、自分自身の心の奥底に、知らず知らずのうちに「国籍条項」をもうけていなかったか、この機会にもう一度検証してみる必要があるだろう。人間にレッテルを貼って、そのレッテルを半断基準にする。そして、そのレッテルが自分に好都合であれば、それだけの理由で全部を排除する。誰も思い当たるところが出てくるはずだ。

近年、「国際化」が叫ばれ、「共生」が叫ばれる。しかし、「国籍条項」ひとつなくせないようで、「国際化」も「共生」も、唱えれば唱えるほどむしろ響く。

行政における「国籍条項」の撤廃と、わが心の内なる「国籍条項」の撤廃は、国際化の第一歩、共生社会実現の第一歩なのである。

（まつやま・けん 京都聖ステパノ教会信徒 大阪教区在日韓国・朝鮮人宣教協働委員会協力委員）



国籍条項

共生社会を阻害するもの

松山

献



「当事者は今」から「当事者は今Ⅱ」へ

呉 光 現

1993年12月、今から3年前のこと。地域の精神障害者の作業所、診療所、行政関係者などと一緒に精神保健講演会「当事者は今」という集会を生野区民センターで持った。このときは初めての集いということで行政関係の協力も得て200人以上が集まり、盛況となった。私にとってこの集い（準備段階からだが）の経験から精神障害者との関わりが始まったと言えるかもしれない。その後「精神障害者の生活の場作りを進める会（準）」（略称：進める会）の活動を当事者やその周りにいる人たち（作業所指導員・医療関係者・ボランティア）と続けてきたのである。

この3年間を振り返るとまず頭に浮かぶのは「よく遊んだ」事である。当初は（今も続いているが）レクリエーションばかりやってきたと思う。ソフトボール、ハイキング、飯盒炊飯、それにプールである。昨年初めてみんなでプールに行った。準備の途中で心配したのは「水」である。やはり楽しいレクリエーションには事故が起こる可能性のあるところはどうだろうかという心配があった。いろんな意見がでる中で、「普通の人」が楽しむ事を精神障害者であるからといって「自制」する事はないだろうということで実施に至ったのである。思いの外、参加者も多く、中には何十年ぶりに水着になったという人もいた。ひたすら遊んできた2年間だがこれが今になって思うと良かったなあ、になっている。私は保健所、診療所、作業所と精神障害者がよく接するところに属していない。それ故毎回といっても良いほど少し会話ができる関係になった人から上記の関係者ですかと訊かれた。その度に「いいえ違いますよ。まあボランティアみたいなものですわ」といつてきたことを覚えている。生野で活動をするようになり約17年になったが、その間いろんな障害者とのつきあいがあった。しかし精神障害者はこれまでの障害者たちとは違いすぐ人間関係が狭いと感じるようになった。なぜかなあと思いつつ彼らとつきあっている自分にはっとしたりする。「別にいいじゃないか。人間関係が狭いといってもこれから広がっていけばいいんだし、僕自身が彼らとつきあうことによって人間関係が広がったから僕も得してるんだ」と思うことにしている。

最近、というより今年に入って「進める会」の活動

に大きな変化が起こった。一つ目は当事者が中心になって一つのプログラムが始まったことである。名付けて「夜のたまり場」である。なんか怪しい名前だが要は月に1回土曜日の夕方に集まりみんなで食事を作って食べて、話をしようということである。何のことはないがそれが又おもしろい。世話人がいて運営しているが、食べるだけ食べて帰る人、食べることもそうだが話を大切にしている人、そしてなによりもその集いそのものを楽しみにしている人がいることである。話は毎回何となくテーマが決まる。就職、睡眠、作業所、家庭等々。考えてみれば自分にとっての日常のことである。それが楽しくもあり、つらくもあり淡々と語る人、少々感情を込めて話す人…、何のことはない、あそこには僕たちができなくなった会話がとてもたくさんあるんじゃないかと思ったりする。

もう一つは今年の10月1日に生野で新しい作業所がオープンした。「トータスハウス（亀の家）」と名付けられた。のんびり行こうという願いがそこには込められている。焦ることによって失敗することはたくさんある。焦って失敗するよりのんびりと構えて失敗した方がいいんじゃないだろうか。同じ失敗ならば。私も呼びかけられてこの作業所の設立に関わっている。精神障害者の作業所は多くの場合（ほとんどすべて）家族会が設立母体になってきた。家族会とは身内に精神障害者がいる人たちの集まりである。今回は家族会を含めて聖公会生野センターや地域の診療所も加わった。私たちはこの作業所が地域社会に開かれたものにしていきたいという願いを持っている。まだできたばかりですべてこれから始まる作業所だけでも地域に人が生きている拠点にしていきたいと願っている。

精神障害の故に狭い人間関係で生きている人がたくさんいると聞く。そして私はしばしば「精神障害者」とつきあうようになった。それ故なのか彼らとの話はとても楽しい。新しい出会い、というか新しい何かを感じるからである。私は精神障害者と日常的に接する場に生活していない。ある人が言うには「素人さん」である。素人の感覚を大切に「地域で共に」という当たり前のことを一步一步重ねていこう、そう願うようになった。あまり無理をせず……。

（お・くあんひょん 聖公会生野センター主事

トータスハウス運営委員）

「ナヌムの家」の上映から…

松井寛子

「従軍慰安婦」というコトバは耳慣れていました。’86年国鉄が民営に変えられようとするときにも、「分割・民営」というコトバをいいやすい記号であるかのようにはじめのうちは聞いていました（自分からそのコトバを使うということは、どちらもほとんどありませんでした）。

これまで、私は、記号として耳慣れたコトバを自分の体実感として受け入れるときのきっかけは「映画」を通じてというのがほとんどです。「分割・民営」というコトバを自分の中に取り込んだときも、森村さんという国鉄労働者を知り、そして彼らとともに一本の映画を創ろうということになったときです。

「従軍慰安婦」もやはりそうでした。鈍感といわれもしかたがないです。ピョン監督とは彼女の第一作目のときからのお付き合いです。去年10月山形国際ドキュメンタリー映画祭で「ナヌムの家」を初めてみて、もうそのときには大阪で上映するつもりになっていました。しかしどうすればたくさんの人に観てもらえることができるのかと頭をヒネってしまいました。なにしろ私のような耳で知っていて知識としてわかったつもりになっている人にはぜひ観てほしいし、なんにも知らないだろう若い人たちには絶対観てほしい。勿論こういうことはどの映画でも考えるのですが、特にこの映画では余計思いました。なぜなら「シンドイ映画」と思って頭から観にこない人もたくさんいるような気がして。

この映画を観るとナヌムの家に暮らすハルモニ（おばあさん）たち一人一人の個性がきっちり描かれているから、私たちはパク・トウリさんにソン・パニムさんにイ・ヨンスクさんにパク・オンニョンさんに、キム・スンドクさんにカン・ドッキョンさんに、想いを馳せることができるから、より一層彼女たちが若いといに受けさせられた苦しみ私の胸につきささってきます。

私は、悲しいことにこの映画と親しくなるまで、「女性のためのアジア平和国民基金」のことも、名称は知ってはいたが実態はよく知らなかったというなきけなほどの体たらくだったのです。だから「右翼」といわれる人たちがこの問題についてすごく反応している



なんてことも知りませんでした。配給会社に何度もいやがらせの電話が入り、そして東京での公開初日に劇場で消火器を撒くにあたってはワースすごい。「国家」にとってはそれほど「重大」なことなんだと改めて認識しました。右翼の妨害でお客さんがこわくなってくださらなかったらどうしようか（実際、東京ではその後2週間はお客さんが減った）、勿論東京でのことは知ってる人は知ってるが、大阪では「内緒」にしておきました。で、緊張のうちに初日を迎えたのです。おかげで何事もなく初日、2日目も過ぎ、たくさんの人に観ていただくことができました。それに多くの若い人たちにも観てもらえることができたことがとてもよかったです。アンケートには「まったく知らなかった」「ショックでした。でも観てよかった」というのが数多くありました。

先日「右翼」が大阪駅で「従軍慰安婦のことなど感受性のナイーブな中学生に教えてどういふものだろうか？」と演説しておったそうです。やはり「国」はきっちりとあやまらねば。そして勿論お金なんですよ（民間基金とは別に）。若い人たちにももっともっとわかってほしいと思います。

（まつい・ひろこ 第七藝術劇場）

「証言」の背後に広がる日常性の記録

西中誠一郎

「元従軍慰安婦」と呼ばれる人たちが、日本軍に強制された絶望的な肉体と精神の破壊と、50年間自国の社会で沈黙せざるをえなかった事実。その闇の深さを第三者が伺い知ることにはできない。ピョン・ヨンジュが監督した映画「ナヌムの家」は、他者に伝えられない真実の重さを記録することの難しさから出発した、ナヌムの家で共同生活するハルモニたちの一年間の記録である。

ピョンたちがこの映画の制作を企画し、初めてナヌ

ムの家を訪れたとき、ハルモニたちに撮影を激しく拒否されたという。以来1年2カ月の間、撮影抜きでナヌムの家に通う日々が続いた。その間も何度か撮影できそうな機会が訪れ、カメラを回しかけたこともあったというが、その途端に人間関係が崩れそうになり、結局撮影機材も持たずに訪問し、部屋の片隅でハルモニたちの日常生活の声に耳を傾け続けた。撮影が始まってからもその姿勢は貫かれている。

映画は、毎週水曜日に日本大使館の前で抗議デモをする姿に始まり、支援団体が主催する公聴会や韓国国会で証言するハルモニたちの様子が映し出されるが、その前後では必ず、ナヌムの家でのハルモニたちの取留めのない会話のやり取りや、炊事洗濯といった日常生活の一場面が、支援する人たちとの交流を交えながら淡々と記録されていく。ハルモニたちがカメラやマイクに向かって、戦時中の悲惨な状況を具体的に語ることはほとんどない。2年以上にわたりナヌムの家に通い続けたピョンたちがそのような話を聞けなかったはずはない。しかし、ピョンはそのことを敢えて聞きだそうとはせず、今ここにハルモニたち一人一人に向き合うことに徹している。逆にその姿勢が、中国の武漢で朝鮮族のハルモニたちが語る慰安所に関する証言や、ラストシーンで克明に映し出されるハルモニの裸体に刻み込まれた深い皺を、日常生活の背後に広がる闇として浮上させる。現在の私たちの生活もまた、この闇の上に立っているのだ。ピョン自身が語っているように、戦場強姦や組織的強姦は現在もボスニアやルワンダや沖縄で繰り返されている。映画の詳は忘れてしまっても、個々のハルモニたちの表情や仕草を思い浮かべながら、「国民基金」というカムフラージュにより賠償責任を逃れ続ける日本政府のあり方や、「証言」を記録し、記憶し続けることの難しさを考えていきたい。

（にしな・せいいちろう フリーライター）



「ナヌムの家」を観て

竜田 宏美

悲痛な体験をずっと誰にも言えず、生まれた故郷へも帰れずに「死にたい」「生きていてもしょうがない」と言いつつ、それでも韓国の若い人たち（娘たち）の為に生き証人として、日本人の植民地支配と性的暴力によって痛めつけられた心と軀をさらして、日本政府の謝罪と補償を訴え続けるハルモニたちの姿を見ると、とても重苦しく、やりきれない気持ちでいっぱいになった。一瞬目を背けたくるような生々しい映像や彼女たちの受けた性暴力には、女性として、人間として生かされなければいけないのに何故こんな悲惨なむごいことをするのだろうと、男性に対する嫌悪さえ感じた。

あるハルモニが「日本人はずるいから、私たちのような生き証人が1人もいなくなるまでじっとがまんして待っているんだ」と語った時、私はハッとしました。それは、既に私も再び同じ罪を犯している。まさにこのずるい日本人であることに気付かされたからだ。私の父はあの戦争に行っていた日本軍人だった。テレビで、日本の戦争責任や、アジア諸国で戦争中に日本がしたこと等について放映されていると、いつも画面に向かってブツブツ文句を言っている。その姿を見ると私は『こういう人たちは頭では解っていても心までは変えられないから、何を言ってもムダだから、いつか1人もいなくなるまで待つしかないんだなあ』と思ってきた。もし、このハルモニのコトバを聞けなかったら、自分の無責任に気付かなかったかもしれないし、そのチャンスも無かったかもしれないと思う。

映画「ナヌムの家」を観てから、在日の韓国朝鮮人のおばあさんに会おうと、この人はいったいどんなふうにして日本に来て（連れて来られて）、どんなつらい体験をしてきたのだろうと思うようになってしまった。

観ている時よりも、観てから1日、1日と日が経つにつれて、じわじわと、いろいろ考えさせられる映画だった。

（たつた・ひろみ 大阪城南キリスト教会）

女・在日・日本社会

今年もTVでキャスターが「就職は今年も超氷河期です。〇〇さんは30社もまわり、こうこう言われました」などと言ったあとに、必ず「〇〇さん、頑張って下さい」と言います。こういう報道の仕方に、疑問を感じます。なぜなら、ジャーナリズムは反権力であり、たえず弱者を庇い、背負っているのです。その中で「頑張る弱者は美しい」という報道は、頑張ると競争そのものを温存しています。報道する側が本当にしなければならないのは、取材した人達が面接を受けた会社で、女だから切り捨てられていったことを、企業名を公表し、そのような会社がよいのかどうかを伝えなければいけないのではないのでしょうか。「〇〇さん、頑張って下さい」で〇〇さんは頑張ったかもしれないが、頑張れない人もいます。日本では、差別する自由、糾弾する自由が認められています。では平等かという、とんでもない。差別してはいけないという基本的な主体がない。糾弾できる人はいいが、できない人達はどうするのでしょうか。そういう形で、たくさんのものが潰れてきました。

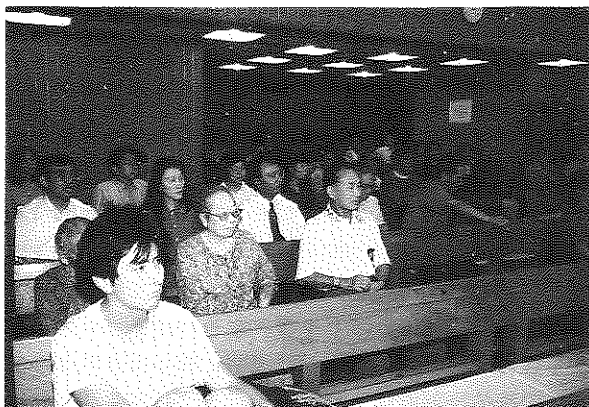
では、TV局のキャスターは、なぜ気がつかないのでしょうか。それは、ジャーナリズムとしてのTV局に就職したのではなく、ブランドで企業を選んだからでしょう。働くということはどういうことか、どう生きるのかを考えていないのです。よく、菊と刀が日本をあらわすのに使われます。平和を祈る意識はあるが、罪を贖罪する意識はない。そう、文化論で片づけてはいけないと思うのです。日本は、構造そのものを拒んできました。

以前、「あなたは朝鮮人だからいい。私は部落だから、一生言えない」というハガキをもらいました。差別される側の序列をつくってしまっていて、朝鮮人だろうと障害者だろうと、差別する構造そのものと闘わなければ、問題はかわらない。問題が見えにくくなっています。

よく「辛さんはいつ日本にいらしたの」と聞かれますが、私は日本の末端で生き、この社会を支えてきた者の子孫、つまり近代国家の奴隷の子孫であると言えます。奴隷制度の中で一番よくわかっているのは権力者で、奴隷を放そうとしない。

たとえば、新聞と聞いて何を思いますか？

ジャーナリズムなどともなく、物流・階級社会であると思います。新聞が支えられているのは配達という末端の労働者です。日本のジャーナリズムの底辺を支えているのは、外国人労働者をはじめとする労働者であり、本当はジャーナリズムが闘わなければならない社会階級を、自分たちが使ってしまっている。そのことに気づいている人がいるのでしょうか。いろいろな矛盾を抱えながら、正義の使者をやっていることに気づかない我々の中には、奴隷根性がくっついてしまっているのです。



女性の問題をやっていると、女性から苦情がきます。男女雇用機会均等法ができ、たくさんの女性が潰れてきました。日本の企業は男社会で、女に男と同じことを求めてきたのです。

そんな中で、朝鮮人としてより、女として辛かったことが多くありました。

会社を設立したのは、25歳の時でしたが、女で朝鮮人の会社に就職する人はいません。ネガティブなことに慣れていない人は、どんどんやめていきました。

銀行に融資を頼むにしても担保がありません。貧しいところに差別が集中する中で、外国人が担保を作るのに、何世代かかるのだらうかと思ってしまう。今から12年前はまだ国籍条項で外国人が国の融資を受けられなかったのです。そんな中で何度も「日本人の男と結婚した方がいい」と言われてきました。独身の女で朝鮮人となると様々な壁があります。10坪程の部屋を借りるのも難しい。又、企業でプレゼンテーションをする時にも、代理店から、辛さんの名を日本名にしてほしいと言われ、プレゼンにすら参加できないこ

ともありました。そんな時に準備をしてきた社員は社長の名一つでプレゼンに参加できないなんてと思う。そこを一つ一つ説明していかなければなりません。そして会社で扱っているのが企業の研修という、日本の最もコンサパティブな部分に触れるもので、「あー、女か」と言われ続けると、つらいものがあります。

女性が男社会の中で仕事をやっている中で感じるのは、男社会はアフターファイブに物事が決まります。つまり接待ですが、女が男を。男が女を接待する場がないのです。女がいつも芸者の立場をとり、対等な関係が築けませんし、アジア、外国人となると更に、一段二段下にみられます。そういう積み重ねが、きつい。

東京都の審議会で、植民地によってこの国に来ざるをえなかった人と、自分で来た外国人とを別に考え対策をねらねばならないと言いましたら、辛さんは外国人差別をするのかと言われてしまいました。何か物を通す時に東京都の職員がいますが、自分達の意志で考えて何か行政をやっていくわけではないので、どこに物を訴えてよいのかが、わからないのです。この社会には日本人しかいない。が、帰化したら、国籍を変えたら、日本人なののでしょうか。あいまいであると思います。

では、在日の社会はと言うと、非常にコンサパティブです。閉鎖社会をつくっています。在日の女は、日本社会の抑圧、女という抑圧、在日社会という抑圧の中で生きています。

TVなどに出て発言するようになると、きっとスポンサーがいるだろうなどと言われます。又、同胞を代して話しているようにも言われます。先輩達から、日本社会に対していろいろ言うのとあなたが傷つくからやめた方がよいと言われました。これは愛ですが、その延長線上には何があるのか考えたいと思います。

より日本人らしく生きるために、右翼にはしる若者がいます。9割の朝鮮人が、本名で生きていけない社会ですが、時に本名を名乗るのが英雄とされます。しかし、闘うのは構造に対してであり、部族間の争いではないのです。

機会均等法で女の行動様式はかわりましたが、男はかわっていません。日本国憲法も、知識としてはすばらしかったが、形としては何もかわっていません。女が社会に進出したのは知的行動力として女性が必要となったからです。体力勝負から知力の社会へかわった時、性別、年齢、国籍の壁を経済的に越えました。今、

女性を活用できない企業は障害者も外国人も活用できません。社会構成の中の全ての構成をいかに取り入れることができるのか、できた所が次の時代に適應できるのです。



女性が、マイノリティが、社会に発言することに対し、追い風がきています。朝鮮人の女がメディアで発言しますと、いやがらせもきます。しかし物おじせずに、出ていくことにしました。出ていくと様々なことを浴びますが、学ぶことも多い。今度、田原総一郎氏と「日本の謝罪の仕方に異議」ありという番組に出ますが、はじめての慰安婦についてのテーマを与えられました。

在日に歴史的な役割があるとするなら、日本の中で差別の異議申し立てをし、おろかな差別を繰り返させないことだと考えます。女に役割があるなら、男性社会に異議申し立てをしていくことでしょう。慰安婦の問題は、日本の男社会対国際社会の女の問題で、日韓の問題ではない。裁判ではおそらく負けるでしょうが負けるとわかって闘っているのは、日本の司法が彼女らに投げかける一言一言が、今後永久に国際社会から審判を受けることを知らなければならない。私はたくさんのことはできませんが、感じることを伝えることによって、追い風を起こしていきます。変遷する日本社会が日本人の良心として、この社会をかえていく一つとして、私が押し出されたと感じています。戦後50年、何もできなかった。しかし冷戦が終わってやっと何かができるようになりました。女も人間として豊かに生きていく社会になった時、男も女も、朝鮮人も解放され、この国が国際社会の中でコミュニケーションがとれるようになっていくのではないのでしょうか。

(文責：編集部)

在日のジャズステージ

夫 総司

チェルノブイリの一発からソ連崩壊、冷戦の終結、原発産業の崩壊、そこからこの10年余りの間に様々な急激な変化が起きた。しかし在日のジャズは、殆ど変化がなかった。

ジャズは、本家アメリカ以外でも60年代半ばからヨーロッパや日本で新しい動きを見せる。ヨーロッパでは、クラシック、特に現代音楽の要素を即興フリージャズに取り入れたジャズが中心だ。冷戦が終わり、東欧でも普及しつつある。今後、発展途上国の経済発展に伴い、世界的に普及するのは間違いない。韓国でもここに来て人気が出始めている。韓国のジャズミュージシャンと、日本人やその他の外国人との共演が活発化しつつある。おもしろいのは、国楽の散調の演奏家やサムルノリと、ジャズとの共演が行われている事だ。散調とは、普通2人でチャンゴ相手に、殆ど約束事無しに即興でやる演奏だが、根本的にはジャズと同じだ。

日本はと言うと、それまで米国の真似だったジャズが、安保闘争を通過する事により、芸術家達も日本と日本人のあり方や自立というものを意識する様になり、フリージャズ中心にジャズが根付いた。しかし、現在は今の日本を象徴するかの様に、ファッションとしてのジャズはあっても芸術としてのジャズはむしろ後退している様だ。その日本で活動する在日ジャズミュージシャン、韓日のジャズの交流も増えて来た。だが、その橋渡しになるどころか、本名を使っている者が殆どおらず(5%ぐらい?)、その存在すらわからない。クラシック界は、本名で活動する者が多いので存在がわかるのだが…。しかし、在日のジャズもやっとな変化が出て来たみたいだ。少しずつだが、本名で活動する者が出て来た。その中から2人紹介する。まず金成亀(キム・ソング)。ジャズ人名事典によれば、1938年生まれ、大阪市東成区在住、ゲイリー・ピーコックが京都滞在中に1年間師事(現在使用中のベースはG.ピーコックから譲り受けた物)。好奇心旺盛で古代史、心理学、現代音楽、邦楽等多趣味。また清水寺の大西良慶氏、民族音楽者の小泉文夫氏の思想に傾倒、人間の心の内面に興味を持つ、とある。たぶん戦後日本で初めて在日ジャズ演奏家で本名宣言した人だろう。

民族意識が高く、韓国のジャズ演奏家とはもちろん、他の芸術家、他のジャンルの音楽家との共演も多い。

ワンコリアフェスティバルでは常連。ジャズにおけるベースという楽器自体、地味な存在で、演奏もどちらかと言うと一般受けする方ではないので、あまり名は知られていないが、実力的には非常に高いと思う。

次にケイコ・リー。CDを2枚、ライブを1回聴いただけの知識だけだが、まず本名・李敬子、ピアニストとして名古屋で活動を始め、歌手に転向。そのライブをたまたま聴いたドラマーのグラディ・ライトがステージ終了後「レコードを作るなら、どんなことでも協力する」と惚れこまれ、半年後デビューアルバム「マジン」を吹き込む。その後早くも(1年もたっていないのではないかな?)2枚目「キッキレイト」(現在、私の愛聴盤。オススメ品!)を録音。初めてライブを聴いた時、ど肝を抜かれた。こんな経験はクラシックの歌手では何度かあったが、ジャズでは初めてだ。グラディ・ライトが惚れたのも、おおげさでない事がわかった。何と言っても声がすごい。こんな豊かな声量を持ったジャズ歌手は聞いたことがない(CDでは、わからない)。元ピアニストなので、詩を楽器のアドリブソロの様に、それも歌手につきものの不自然さなくスウィングさせている。日本のジャズアルバムでは、非常にレヴェルが高い。人気の方も、スウィングジャーナル(どちらかと言うとミーハー的なジャズ雑誌)の人気投票、女性ジャズボーカル部門で5位になる。ただ世界的に見れば、1950年代からは殆ど進歩がないと言えるかもしれない。しかし、注目される事は、という一見、普通の女の子に見える様なミュージシャンが、本名で出て来た事だ。少しずつだが、在日のジャズ、在日コリアン、日本社会、全てが変わって来ている様だ。今後この変化が少し勢いを増しそうな様子だ。少なくとも在日のジャズミュージシャンに刺激を与えるだろう。人間は別にどう生きようと人の勝手だ。しかし後悔しない様に、自分の納得できる生き方(尹伊桑式に言えば「音楽家は本来音楽だけをやっていればよい。しかし、人間としてだまって見ているわけにはいかない事があれば、やらざるをえない」)をしたいものだ。在日コリアンは、大多数が、今まで納得できる生き方を出来なかった様だが…。

「後悔のない、納得のいく人生とは?」だれもが、ぶつかる問題だ。(ぶ・ちょんさ FMサラン)

連載マンガ②

이산가족 (離散家族)



⑦昨日は漢方の医院で診察を受けてきて、薬をいっぱいもらって来たんですよ。腎臓、胃、肝臓、心臓が悪くてひどい低血圧だって。

⑧食べ物もスイカ、瓜、小麦粉、豚肉、鶏肉、酒、イカ、タコ、コーラ、ハム、冷麺、お好み焼きなどを食べるのはだめということなんだ。平素僕が好きな食べ物なんだけど当分の間、見ているだけで疲れそうだよ。

⑨崔先輩はそれでもハエリンの面倒を見て、家事もよくするじゃないですか。そう、僕がしないと、君のように離散家族になっただろうに。

⑩それで、いつ又みんな集まるんだい? そうですねえ、みんな集まれば、なんと云いますか又再発しそうで、それが僕はより心配なんですよ。

作者：崔正鉉(ちえ・じょんひょん)
パンチョギ(もう一方)の愛称で親しまれる。
1960年韓国大邱生まれ。娘の誕生以降子育てをマンガで表現。そのユニークな描写と男性優位の韓国社会で家事分担が評価。1995年第1回平等夫婦賞受賞。

①久しぶりだね。どこ行って来たんですか?

②幼稚園に行ってきたんだよ。赤ちゃんのお母さんは退院したかい? はい、まだ体は良くはないんですが退院しました。

③家で見ないようだけど? 赤ちゃんのお母さんは実家にいて、赤ちゃんは僕の母が連れていきました。

④僕は時々家を見に来て、毎日3カ所を往復しています。完全な離散家族だね。

⑤まだ肝炎指数が高いけど、職場に行こうと思うんです。とにかく大変な人やね。

⑥僕の家にも大変な人が一人いるよ。ハエリン(娘の名前)のお母さん?



天下無人と大同小異、そして分かち合い

宋 晃 用

「分かち合いの家」のすべての家族たちに春のつぼみのような生き活きとし、生ける復活の主イエス・キリストの愛が共にあらんことを願います。暖かい日差しをさえぎるように、時折冷たい風が私たちの中を吹いていきますが、春は目前です。

なぜなら、道ごとに開花した木蓮と豊かなれんぎょうが満開で、野にも青々とした木々の緑がいつぱいだからです。

何か淡い希望であったことが一瞬のうちに成し遂げられるような気がいたします。冬が去り、春が来る間あつい影を打ち破り、新芽が顔を出す間に私たち「分かち合いの家」の周りには途方もない事（実に途方もないことです！）が多くありました。この短い紙面にはとうてい全部載せることはできず、いざ話をしようと思ってもどこから始めたらよいかわかりません。

ところで今日は「分かち合いの家」の話をしてみましょう。「分かち合い」「分かち合いの家」とはなんぞや？ どうして「分かち合い」という言葉をつけたのか？ という質問に対して答えてみようと思います。すでに何回かに分けて聖書とイエスの生を通して語ったので今日は墨子の言葉を通して話してみようと思います。

墨子は貧しい人たち、働く人々の立場を代弁した人でありました。かれの多くの弟子たちは労働者、技術者でした。彼はまた平和、生命、反戦運動家でした。彼は陰と陽、天と地、理性と感性、理想と現実が相生と相補の存在であることを説き明かしました。当然、平和主義者であり、生命運動家であり反戦主義者でありました。また実践する行動家でした。

彼は「天下無人」と申しました。「天下に他人というのはない」ということです。「すべての人は神の形に似せられている」という聖書の言葉と「すべての人」甚だしきに至っては犬にも仏性がある、という仏家の教えや「人乃天（人すなわち天）」という東学の教えと一致する言葉です。この言葉は「おまえの隣人をおまえの体のように愛せよ」という言葉の根拠になるものです。

天を畏敬するやいなやどうして隣人に仕えられなく、神を恐れるやいなやどうして隣人を感じることができのでしょうか。天下に他人というのはあり得なく、

すべて私の、又は他の姿であり、神の形に似せられた大切な命であります。

彼はまた「大同小異」と語りました。「お互い異なる小さな者が大きな群になり共に一つにあって生きる世の中」を称することです。どんな風に言おうとすべてわかってくださると信じています。

「分かち合いの家」「分かち合い運動」は天下無人と大同小異の世を共に作っていく人たちのことです。小さき名前と真心と祈りが集まり成し遂げられる一所の心が、浮き浮きする大同の世を開くラッパの音が新しい春、新しい時を告げます。そして至る所につぼみがよきによきとわき出て、索漠とした灰色の世を青々と覆うようになるのを心から願います。前号で述べましたが沈康順（シム・ガンスン）お母さんは紆余曲折の果てに心臓を開く手術を受けましたが、幸いにも癌ではありませんでした。しかし依然として腎臓の周囲には数十カ所の腫瘍があり心臓と脳は結核菌に侵されています。乾いた木の皮よりもっとおあつい皮膚に、眼も深くおちこんでしまいましたが、天井一杯に広がるイエス様の夢を見て意識を回復しました。死の入り口から少し引き戻されて、送られたようなものです。すべてが私たち「分かち合いの家」の家族たちの祈りのおかげです。昏睡状態でも「分かち合いの家」の家族の顔一つ一つが浮かんできました。そして全身を投じて話しました。「私は悪い行いはしませんでした。『分かち合いの家』に助けてもらい生きてきて、とても苦しくて一生懸命祈ってきました。司祭様もいらっしゃり、伝道師様も、私を助けてくれる人がたくさんいます。生きたいです。生かしてください。その瞬間、臥していた病院の天井に数十、数百のイエス様の顔が浮かび意識が元に戻りました。」

去る一週間「青少年休み場」（主に家庭崩壊したり、



非行に走った少女たちの一時避難所施設。奉天洞の分かち合いの家の活動の一環としてある）にいたかわいい女の子一人が自宅に帰りました。法務部（日本の法務省）保護観察所から保護観察の対象にされた子どもですが、3ヶ月近く「休み場」生活で、救いようのないと思われていた問題児から再び身につけるようになった制服を一日中身につけてとっても賢い女の子になり、そして待っているお母さんと涙で抱き合い戻っていきました。送別会の時はみんな泣きました。

天下無人です。

私たちは小異を持っていますが、大同の世を創っていく大切な人です。「分かち合い」はお互いが期待し完になる人を創る方法であり大同の世を創っていく小異の実践的生の方式です。

分かち合いの家族みなさんの平安と新しい機運が輝くことを復活なされたイエス様の名によって祝福いたします。

（ソン・ギョンヨン

大韓聖公会ソウル教区奉天洞分かち合いの家司祭）



奉天洞分かち合いの家の近辺
強制退去のあと、人が住めないように破壊された

＝「分かち合いの家」とは＝

大韓聖公会ではソウル教区に4つ、大田教区、釜山教区にそれぞれ1つずつ合計6つの「分かち合いの家」がある。「分かち合いの家」はいわゆるスラム地域にある。韓国、特にソウルでのスラムの形成は特に1970年代の近代化・工業化と共に農村が疲弊し、離農者が増大したことにある。多くはそのころからの地方からの移住者である。韓国ではスラムに教会、又は施設を持ち地域住民と共に活動することを「貧民宣教」という。近年、ソウル近郊ではスラム地域の「再開発」の名の下に強制退去が組織的になされている。バブル時代の日本の「地上げ」に似た現象であるが、違うのは韓国の場合はさらに暴力的である事、そして住民が自分たちの居住権、生存権を賭けて「再開発」と闘っていることであろう。

今年10周年を迎えた大韓聖公会の「分かち合いの家」運動は地域の高齢者問題、青少年問題などの福祉的な活動から、住民の自立生活に向けた生産者協同組合運動まで幅広い活動を行っている。

聖公会生野センターでは主にソウル教区の「分かち合いの家」と相互訪問、研修プログラムの交換などの交流を続けている。今回の文章は奉天洞「分かち合いの家」の1996年4月号のニューズレターから翻訳したものである。

ちよっとひと息①

마른 나무에 물이 날까? (剛木水生)

・乾いた木から水が出てくるか？

乾いた木から水が出てくることはないという意味であるが、原因の無いところから結果が生まれ得ないと言う意味

ちよっとひと息②

二子山部屋脱税問題

「ただ今の協議について御説明いたします。行司軍配は二子山部屋の税金とったりに上がりかけましたが、お金があまりにも、のこったのこったとなりましたので、税務署の税金取り直しと致します」

ナーンテ協議もしてほしいなあ。

（作：笑福亭仁嬌）

サルリム (살림・共生) とウルリム (울림・響き) 菊地邦香

聖公会生野センター機関誌名が韓国語で“ウルリム”（響き）になって思い出したのが“サルリム”でした。3年前の日韓聖公会宣教セミナーの主題「サルリムのための分かち合いの実践」に出てきた韓国語の“サルリム”は「生かし合うこと」という意味でしたが「共生」と同義語的に理解されました。大阪の聖ガブリエル教会は戦前の迫害で土地建物を失いました。1984年に日韓の聖公会が公式な交流を始め「日本聖公会が36年間の植民地支配及び今日に至るまで、なすべきことをなさず、なすべからざることをなしてきた罪を懺悔し、深く陳謝し」その後の取り組みの一つとして大阪・聖ガブリエル教会復興が挙げられました。日本は経済成長が著しいとは言え、小さな聖公会の各地の教会は経済的に苦しく、ガブリエル教会復興募金は進みませんでした。各教会や信徒にとって日韓の歴史や在日の方々の生活よりも教会の雨漏りや自分の生活の方が関心が強く、差別や人権に関わることは政治的、社会的な問題であって教会の信仰とは離れたことだと思われがちでした。しかしガブリエル教会の経緯や日韓の歴史の学びを通して、今までの福音理解に徐々に変化が起きました。特に聖ガブリエル教会は礼拝堂の復興のみではなく、「地域の人と共に生きる教会」を目指す再建構想を掲げ、これが1970年代から世界中の聖公会に導入された「宣教における協働」理念をさらに具体的に示した例として新鮮な共感を呼び、遂に募金運動が全国に受け入れられる原動力になりました。まさに“サルリム”の実践でした。

1992年、聖ガブリエル教会、聖公会生野センターとこひつじ乳児保育園が併設されました。そして教会は大阪教区と信徒が支え、保育園は社会福祉法人が支え、「聖公会生野センター」は文字通り日本聖公会が支えてきました。日本聖公会の管区、大阪教区、全国の教会、関東3教区、個人、団体後援などによって年間約800万円が献げられてきました。

関東3教区の場合を少しご紹介しましょう。日本聖公会と大韓聖公会が正式な交流の始まった1984年の日韓聖公会宣教セミナーでの共同声明によって表明された「在日韓国朝鮮人に対する差別問題を緊急かつ重要な宣教課題」と決意したことの一環として「日韓の歴

史を学ぶ会」が85年にスタートしました。初回は日韓協働委員会が主催し、翌年から関東3教区に呼びかけ9月1日に近い主日に関東大震災で虐殺された朝鮮人の追悼と、在日韓国朝鮮人の歴史の学びが続きました。1992年に生野センターが完成してから総会決議を尊重してセンター支援継続のための学びとし、1994年以後、主催を関東3教区生野委員会、共催を日韓協働委員会として、3月1日に近い主日にも朝鮮独立運動を記念する日として、半年おきの学びの会が継続されました。3教区の内、横浜教区は「日本聖公会生野センター横浜教区友の会」を作り個人会員で組織し、北関東教区は協働委員会、宣教部が中心になって、東京教区は日韓小委員会や在日プロジェクト委員会が中心になって生野キャンペーンを企画してそれぞれが祈りと、学びによって聖公会生野センターを支え、既成の組織を越えて募金活動が行われています。学びの会では映画、講演、芝居、音楽、証言、VTRなど工夫を凝らし、ある時は韓国料理を楽しみながら、ある時は宿泊・現場研修しながら今日に至っています。私たちは今までの学びを通して生野を覚え、在日を覚え、日韓の歴史に触れながら神の福音の響きを感じて、生かし合うよろこびを与えられてきました。これからも聖公会生野センターとの“サルリム”（共生）が福音としての“ウルリム”（響き）となって全国に広く伝わっていきますようにお祈りしております。

（きくち・くにひろ 川越キリスト教会信徒
日韓協働委員会委員）

ちょっとひと息③

アトランタオリンピック女子マラソン

「アトランタオリンピックの女子マラソンは感動したな」
「そうやな、有森選手が銅メダルやもん」
「金メダルのロバ選手は、はやかっただ」
「うん、ロバがあないはいとは、思わなかったで。」
「けど、ながいあいだ練習したんやろな」
「そらそうや、昔から言うやろ、ローバは一日にしで成らずや」
（作：笑福亭仁嬌）

在日韓国・朝鮮人宣教協働委員会の働き

<シャロームの実現に向かって>

磯 晴久

1. 在日韓国・朝鮮人宣教協働とは

私は「在日韓国・朝鮮人宣教協働委員会」という名称に対して、常々違和感を感じてきた。この名称からは、在日韓国・朝鮮人への宣教というニュアンスを強く感じるからだ。

私は、この委員会が「シャロームの実現に向かって、日本聖公会大阪教区における日本人と在日韓国・朝鮮人の宣教協働を推進する委員会」だということを、いつも思いながら、この委員会と関わってきた。

在日韓国・朝鮮人宣教協働委員会は、1981年日本聖公会大阪教区宣教部ガブリエルプロジェクトとして出発した。翌年この使命の重要さにかんがみ、大阪教区教務局から教区会に「在日韓国・朝鮮人宣教特別委員会設置の件」が提案された。議場では、委員会の名称を巡って議論が白熱、結果「在日韓国・朝鮮人宣教協働委員会」となった。当初の働きは、生野こども会に代表されるように、生野区での活動が中心であった。その後、生野区での活動の主体は、聖ガブリエル教会、聖公会生野センターであるとの認識から、活動の中心は、教区内教会聖職・信徒・求道者への働きかけと変化していった。宣教協働の場は、生野地域や聖ガブリエル教会の働きにとどまるものではなくて、各教会とその地域、各人とそれぞれの生活の場であることを深く認識するようになっていったのである。

2. 一歩、歩んで、出会う

先日、新聞に次のような内容の記事が掲載されていた。……1989年プリマバレリーナ、マイヤ・プリセツカヤとチェロの世界的演奏家ポール・トルトゥリエが東京で初共演することになった。ところが本番直前の打ち合わせで、曲のテンポをめぐって対立が生じ、「踊れません」「弾けません」という最悪の事態になった。それまで二人はロシア語とフランス語の通訳を介して会話を交わしていたが、そのときトルトゥリエは直接、英語でゆっくり語りかけた。「あなたはいま、そこにいます」「そして私はここにいます」「わたしは一歩、歩きます。あなたも一歩、歩きます」「すると、私とあなたはここで出会うことができます」夢の共演は実現した。……（毎日新聞9月5日余録欄）

私は、どちらかが一歩下がるのではなく、各々が一歩、歩き出会うというところが大変印象に残った。宣

教協働というのは、共に一歩、歩み出すことから始まるのだと思う。殊に、日本人にとって一歩、歩み出すというのは、差別する側・無関心な側に安住するのではなく、まず韓国・朝鮮と日本の歴史や韓国・朝鮮の文化を学び、在日韓国・朝鮮の人々の声を聴くことである。協働委員会では、出会いの場、学びの場として、2回にわたる「出会い in IKUNO 研修会」開催や、10回にわたって「宣教協働について考える懇談会」を継続して来ている。この秋にも「奈良明日香地方を探索し、日本と韓国・朝鮮の文化の交流を学ぼう」という会が実施され多くの方が参加した。

3. シャロームの実現に向かって

私が、この委員会と関わる中で、与えられた聖書のことばは上記の「シャローム」であった。シャロームは平和、健康なこと、傷つき痛んでいないこと、太平安なこと、充実していること、という意味のことばである。そして、シャロームの実現が、私たちの使命・在日韓国・朝鮮人宣教協働委員会の使命（神のみ心）であり、また、このことばは個人の魂の問題にとどまらず、社会的なひろがりをも担うということを教えられた。新約聖書のことばギリシャ語でシャロームのことを「エイレネー」という。このことばの原義は「つながっていること」。すべてがうまくつながっていることを、シャロームと言っているであろう。

シャロームやエイレネーということばを思いつつ、この世を見つめると、そうではない状況であふれている。在日韓国・朝鮮人への差別は根深く、元従軍慰安婦や元軍属として徴用された人々の涙・怒りは無視されている。日本人と在日韓国・朝鮮人はうまくつながってはいない。数年前、ボブ・ディランのデビュー30周年記念コンサートに特別出演したスティービー・ワンダーはメッセージの中で、次のように語った。「…今選ばれる指導者は、人と人とのきずなを生み出せる人物でないといけな…強い責任感を持ち、心を広く開いて、多数の中の少数の声を聴く人だ…」

私はこのことばに大変感銘を受けたが、在日韓国・朝鮮人宣教協働委員会の働きは、日本人と在日韓国・朝鮮人とのきずなを生み出すことだと思う。それがシャローム実現の第一歩であると思う。

在日韓国・朝鮮人宣教協働委員会への皆様の祈りと、支援、協力をよろしくお願い致します。（いそ・はるひさ 司祭 大阪教区東豊中聖ミカエル教会牧師）

聖公会生野センターへのご支援をお願いします

□後援会費

年額 1口 3,000円 (個人)

1口 10,000円 (団体)

※共に何口でも結構です。

・郵便振込

00960-0-133429

「聖公会生野センター後援会」

□自由献金も受け付けています

・郵便振込

00910-1-321780

「聖公会生野センター」

・銀行振込

三和銀行 東大阪支店

普通預金 3711311

「聖公会生野センター」

余 韻

■第2号をお届けします。「第1号」は出すことに意義がある。「第2号」は続くことに意義がある。さて第3号は如何に？ 今後充実した物をお届けしたいと思います。次号は1997年5月発行予定です。次号からは季刊化が決定しました。今の生野センターの力量で年4回は出せるだろうかという不安もあるのですが、なせばなるの気持ちでがんばります。

(光)

■9・1講演会が辛淑玉氏の断は、90分飽きることなく、楽しくきけた。今回の울림 (ウルリム) は実は笑える部分を省略してしまった…。笑いたい人はぜひテープでもきいてみて下さい。「そうだ、そうだ」と叫んでしまうかも…。

(恵)

■1年前から、我が家の一員に雑種の犬が加わった。家の中で飼っているの、犬の見方、考え方はどうなのか、とふと気になることがある。新しい視点が与えられたような気がする。一体どこに立って自分は見ているのか、わずか数十センチの目の高さですら大きな差を生じるようだ。「울림 (ウルリム)」が提供する視点が、当たり前と思っていた見方に、新たな視座を提供できたと思う。

(宮)

■風化させてはいけないと叫びまた考えてきた「思い」。世の流れという風にさらされ、粉々になってしまった「思い」をジグソーパズルのように組立て直している毎日。情報のシャワーを浴びるために、避けてきたパソコンとほんの少し仲良くなってみようかな。

(ハミー)

■編集担当者がみんな頭をひねって絞り出した「울림 (ウルリム)」という題字の、この生野センター機関紙も、第2号発行の運びとなりました。嬉しいことです。いまごろになって、「울림 (ウルリム)」という言葉のもつ美しい「びびき」に、あらためて感じ入っています。響きにはいろんなものがありますが、「울림 (ウルリム)」には、決して押しつけがましきや不快な所がなく、透明で、清冽で、時には孤高でもありつつ、と同時に、暖かく、包み込むような、そしてどこまでも鳴り渡っていく——。そう感じるのは私だけでしょうか。生野の片隅からとはいえ、そこから四方に向かって発信される、この「울림 (ウルリム)」を、どうか見守り支えて下さい。

(大)

原稿募集

生野センターでは울림 (ウルリム) の原稿を待っています。あなたの身近なところで出会った人、出来事、心に残った本、映画など……。もちろん生野センターへの展望、울림 (ウルリム) への感想も大歓迎です。

発行所：聖公会生野センター

〒544 大阪市生野区小路東1-17-28

TEL 06-754-4356 / FAX 06-754-4357

NIFTY Serve ID : CYJ02040

発行人：木村 幸夫

編集人：大橋 襄